

# 紀 要

## 第10号

目 次

序	
縄文時代石器研究の方法論序説	(鈴木 康 二)
弥生社会からみた独鈷石	(田 井 中 洋 介)
犬上川左岸扇状地における考古学的研究	(近江歴史クラブ)
犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳群について	(北 原 治)
近江における階段式石室の検討	(堀 真 人)
犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室	(辻 川 哲 朗)
古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地における馬具副葬土壙墓について	(山 中 由 紀 子)
犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について	(中 村 智 孝)
犬上川左岸扇状地周辺の生産と流通の概観	(畑 中 英 二)
東大寺水沼荘の開発	(神 保 忠 宏・畑 中 英 二)
「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察	(重 岡 卓)
古代王権論にむけて	(細 川 修 平)
日野町出土の瓦器碗をめぐって	(土 垣 幸 徳)
滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境	
井口城とその立地	(神 保 忠 宏)
水と環境教育	(佐 野 静 代)

1997. 3

(財)滋賀県文化財保護協会

# 階段式石室の検討

～犬上川左岸地域を中心に～

堀 真人

## 1、はじめに

犬上川左岸地域の古墳時代後期を理解する中で、この地域の古墳群内にみられる特殊性として階段式石室の存在をあげることができるだろう。階段状石室は通常「竪穴系横口式石室」の範疇に捉えられている石室形態の一つである。

「竪穴系横口式石室」の名称は、1962年に賀川光夫氏（文献101）によって初めて使われた。その後北九州の初期横穴式石室を研究するうえでは、欠かせない学術用語として定着した。その後、白石太一郎氏（文献136）、柳沢一男氏（文献185）、蒲原宏行氏（文献124）、小田富士雄氏（文献121）、森下浩行氏（文献182・183・184）、土生田純之氏（文献164）らによって、概念規定・型式設定・系譜の問題について研究されてきた。しかし、その統一概念の規定が明確に示されてこなかったために、「竪穴系横穴式石室」が極めて広く捉えられてきた。

このような北九州を中心とした初期横穴式石室の研究の中で扱われてきた「竪穴系横口式石室」を、滋賀県内の横穴式石室ではじめて取り上げたのは、水野正好氏（文献90）である。水野氏は、蒲生郡安土町に所在する竜石山古墳群内の竪穴系横口式石室を新羅の慶尚北道達西面古墳群、慶尚南道梁山夫婦塚古墳に故地を求めている。その後中谷雅治氏（文献149）は、蒲生郡竜王町に所在する三ツ山古墳群内の竪穴系横口式石室を北九州のそれと比較し、類似性からそこに源流を求め、慶尚北道達西面古墳群を故地とした。藤川清文氏（文献62）は、愛知郡秦荘町に所在する上蚊野古墳群内の竪穴系横口式石室を中心に型式分類・変遷を行い、その源流を国内ではなく百済の驪州郡州内面梅龍里8号墳に求めている。このように近江における竪穴系横口式石室は、朝鮮半島からの影響、つまり具体的には渡来系氏族の依知秦氏のような集団の移動をもって理解されている。

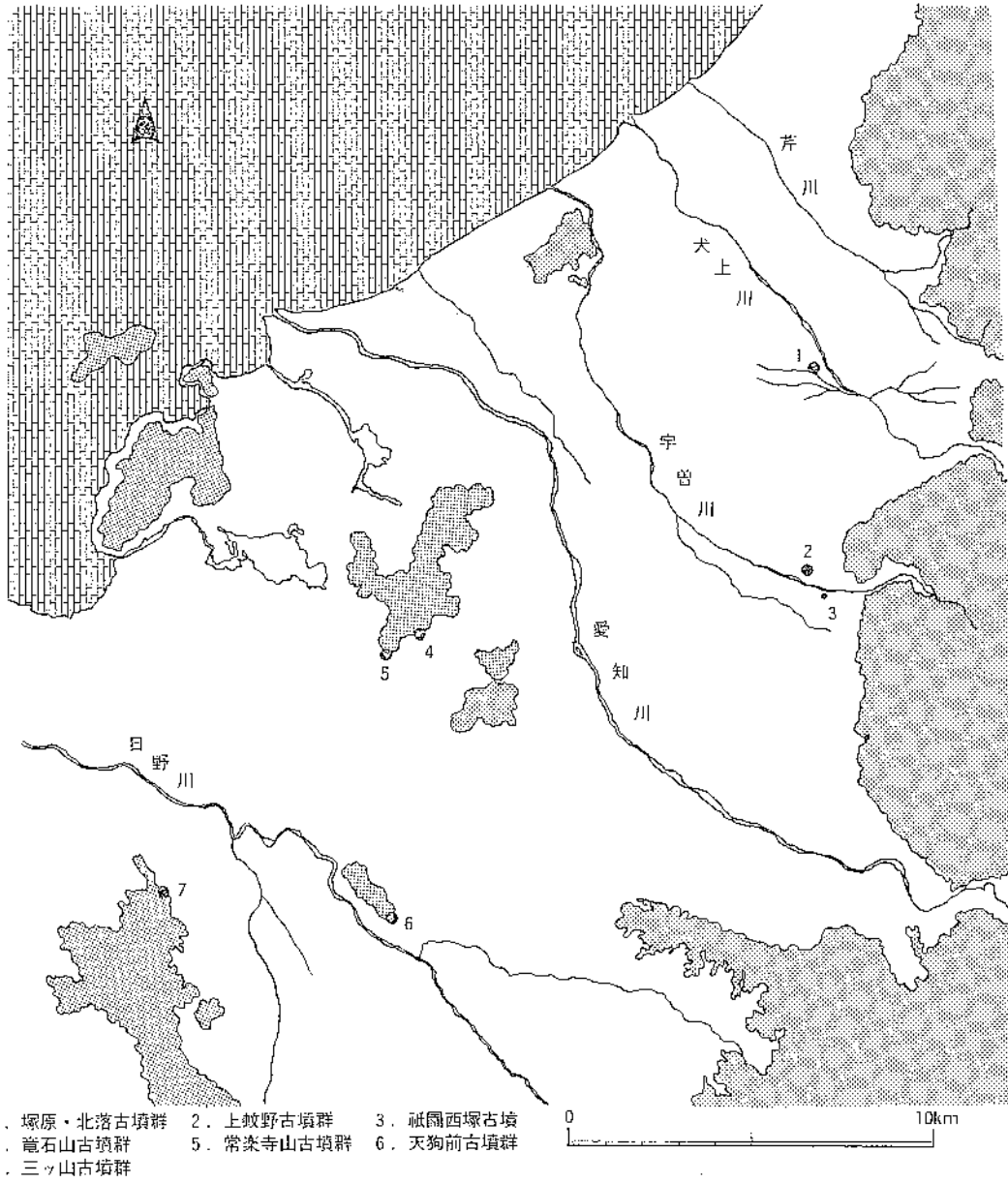
近江における竪穴系横口式石室は、横穴式石室に先行する竪穴系の埋葬施設に横口を取り付けたもので、初期横穴式石室の一種として理解されているも

のとは、一線を画するものと理解してもよい。つまり、近江において竪穴系横口式石室と呼ばれる石室は、玄門部もしくは、羨道部の床面部分に石積みがなされ、その石積みの上面が羨道の床面と同一レベルになるように構築している。その結果、玄室の床面部分と羨道の床面部分のレベルに差が生じるのである。中谷氏が「階段状石積みのある横穴式石室」と呼んでいるように、あたかもそれが階段状を呈しているのである。これは、近江における竪穴系横口式石室の最大の特徴といってもよいだろう。これは、主に北部九州にみられる竪穴系横口式石室が竪穴式石室から横穴式石室に移行して行く段階の一形態として理解されているのに対して、近江におけるそれは、初期にみる姿というよりもある程度横穴式石室という概念が定着した後も石室の1つのバリエーションとして残ったものと捉えたほうがよいだろう。だから、通常竪穴系横口式石室がらとよばれる石室と区別してこれらを階段式石室を呼びたい。

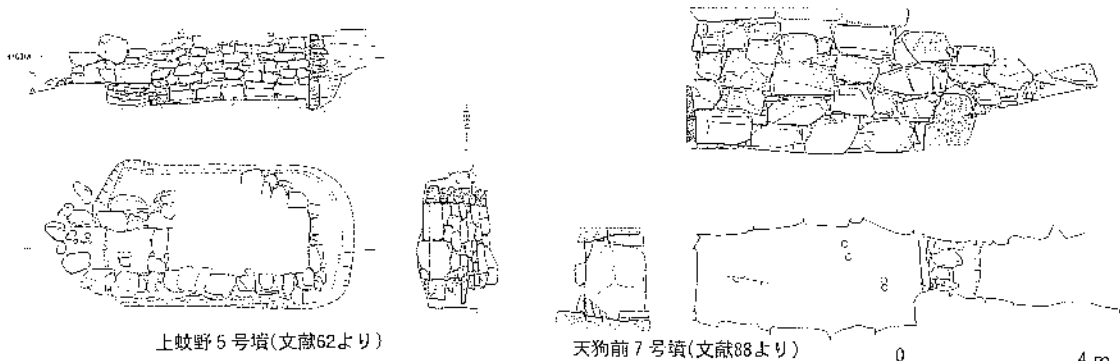
この階段式石室の近江における分布状況（第1図）は、犬上郡甲良町塚原古墳群（文献38・39）、北落古墳群（文献26・27・28・29・30・31）、愛知郡秦荘町上蚊野古墳群（文献62・78）、愛知郡湖東町祇園古墳群西塚古墳（文献77）、蒲生郡安土町竜石山古墳群（文献90）、常楽寺山古墳群（文献86）、蒲生郡竜王町三ツ山古墳群（文献149・190）、蒲生郡蒲生町天狗前古墳群（文献88）、栗太郡栗東町和田古墳群（文献201）においてその存在が知られている。

## 2、階段式石室の分類方法

階段式石室を検討する際、犬上川左岸扇状地における横穴式石室のほとんどが、後世の開発により墳丘はもとより石室の大部分が削平され基底石を残すだけであったり、またそれすらも無く石材の抜き取り痕を残すのみで遺物さえも残っていないものがほとんどであることを前提にしなければならぬ。そのため本来は三次元的な検討をしてしかるべきもの



第1図 近江における階段式石室の分布



第2図 近江における主な階段式石室 その1

なのだが、それができないという資料的な制約がある。そのため、その多くを平面構造の検討に頼らなければならない。しかし、階段式石室の玄室と羨道に高低差が生じるという構造上の特徴によって、上部構造については分からないものの、玄室の下部構造においては階段部分を認識することができる高さまで残っている場合が多い。そこで、階段式石室の検討材料として平面構造と階段部分を取り上げ、分類を試み、検討していきたい。また、本稿における土器の年代観は、本共同研究の畑中論文に基づくものであり、報告書の見解とは必ずしも一致しない場合がある。

#### (1)平面構造における分類方法

平面構造の分類においては、蒲原氏（前掲）や森下氏（前掲）の竪穴系横口式石室の概念規定に添っておこないたい。両氏は、竪穴系横口式石室の概念規定を、狭長な長方形を呈して主軸直交葬が不可能で、主軸平行葬を指向する石室であるとしている。具体的には、玄室の幅が1.6m以内の石室を主軸平行葬を指向しているものと想定して、主軸直交葬指向と主軸平行葬指向の石室を判別する指標の一つとして1.6mという数値をあげている。これは、古墳時代成年男子の平均身長が1.6mであるとするデータに基づいてのものである。近江の階段式石室における埋葬状況をみても、確認例が少ないため確実であるとはいえないながらも、玄室幅がそれぞれ1.4mの上蚊野5号墳が主軸平行葬、1.9mの竜石山2号墳は主軸平行葬、2.0mの竜石山4号墳と1.8mの竜石山5号墳は主軸直交葬であることからもある程度の傾向を判断する材料にはなると考えていだろう。そこで階段式石室の埋葬指向を判断する材料のひとつとして、玄室幅が1.6mより狭い（1類）か広い（2類）かで分類する。

#### (2)階段部分の分類方法

階段部分の分類方法としては、階段の形態・石材の使用法に基づいて分類したい。

階段の形態については、まず段が階段状を呈しているもの（A類）、垂直に立ち上げているもの（B類）の2類に分類する。さらにその2類を細かくし、その階段状を呈しているものの中でも階段を石のみで形成しているもの（1型）、階段のフラット面に

土を充填するもの（2型）に、垂直に立ち上げるものの中でも多石積みのもの（1型）、一石のもの（2型）に分類する。

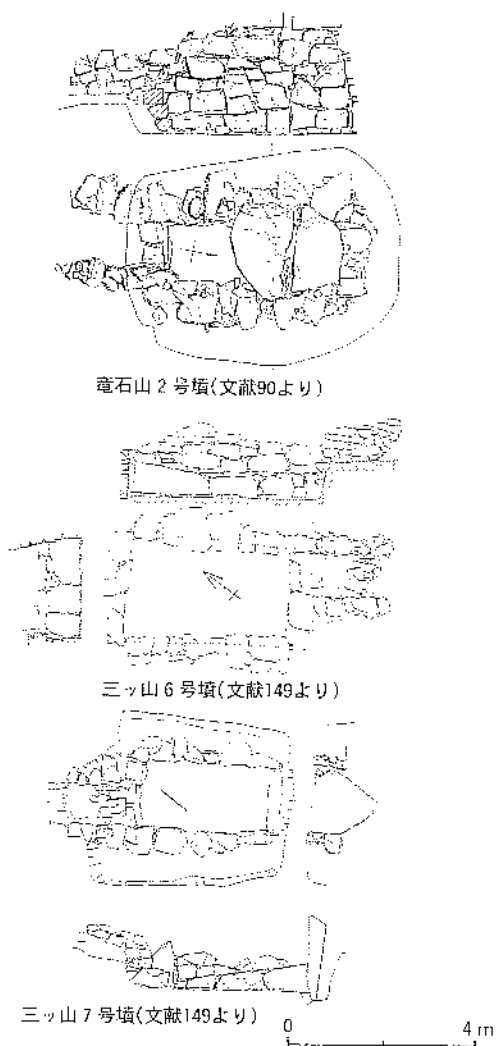
### 3、階段式石室を含む古墳群の概観

#### (3)犬上川左岸扇状地（北落古墳群・塚原A古墳群）

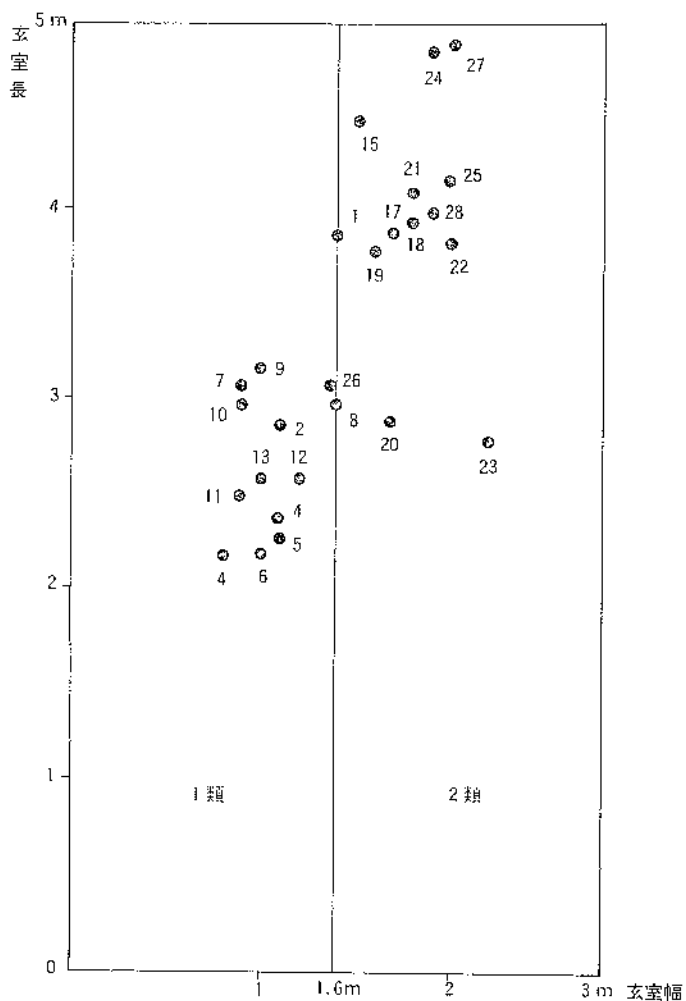
北落古墳群・塚原古墳群が位置する犬上川左岸扇状地には、橋崎古墳群、金屋南・外輪古墳群、栗林古墳群、寺道古墳群、三博・四ツ塚古墳群、などが存在している。大部分が、戦後の開墾のために墳丘が削平されており、墳丘が良好に遺存しているものは少なく、発掘調査によってはじめて目にすることが多い。

北落古墳群は、平成元・2・4・5年と数次にわたって発掘調査がなされている（文献26・27・28・29・30）。その中で、平成2年度発掘調査の5号墳、平成4年度発掘調査のS X9205の2基が階段式石室であることが確認されている。5号墳・S X9205は、ともに玄室幅が1.6m以下を示し、1類である。階段施設は、5号墳・S X9205はともに玄門部には主軸に直交して据えられていたと思われる石の抜き取り痕があるが、石積みについては不明である。築造時期については、5号墳は不明、S X9205は築造時期はI段階中相であろう。

塚原A古墳群は、平成3・4年度に発掘調査が行われ（文献38）、21基の横穴式石室・小石室及び3基の土壇墓が検出されている。その中で、1・2・6・7・10・11・13・19号墳が階段式石室であることが確認されている。玄室幅に関しては、すべての古墳が1.6m以下で1類である。階段施設は、残りが悪いものがあり判別のつかないものがみられるが、A類2型が主流であることは動かないであろう（註1）。塚原A古墳群にみられるA類2型は、玄門部に主軸に直交する形で一石、そして同じく主軸に直交する形で羨道内に2～4石を積み、それらの間に土を充填することによって階段状に仕上げたものであろう。これは、玄門部・羨道内の石積みが同一レベルから積み上げていることより、石積みを行った後で、土の充填を行なうという工程で造られたものと推定できる。群内での階段式石室の築造時期は、11・19号墳がI段階中相期において築造され、その



第3図 近江における主な階段式石室 その2



第4図 石室平面プラン分類(番号は第5図に対応)

古墳名	所在地	形	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	石室幅(m)	石室高さ(m)	石室奥行き(m)	石室形状	石室分類	石室形状	石室高さ	石室奥行き	石室幅	石室形状	石室高さ	石室奥行き	石室幅	石室形状	石室高さ	石室奥行き	石室幅	
1 志保古墳群 5号墳	上野原町	円墳	1.0	0.9	2.9	1.3	3.8	2.23	1-中	1													
2 SA255	"	円墳	1.0	0.9	3.9	1.0	6.2	2.14	1														
3 塚原古墳群 A 1号墳	"	円墳	2.0	1.4	2.0	1.4	3.6	1.66	1-新	1	A	2	5.0										
4 2号墳	"	円墳	2.0	1.4	2.4	1.3	3.3	1.63	1-新	1	A	2	6.0										
5 6号墳	"	円墳	2.1	1.3	2.3	1.3	2.9	1.77	1-新	1	A	2	4.0										
6 7号墳	"	円墳	2.0	1.3	2.2	1.2	2.6	1.81	1-新	1	B	2											
7 10号墳	"	円墳	1.9	1.0	3.1	1.1	3.4	2.82	1-新	1	A	2	4.0										
8 11号墳	"	円墳	1.6	1.0	3.0	1.6	4.8	1.88	1-中	1													
9 13号墳	"	円墳	1.8	1.0	3.2	1.2	3.3	2.67	1-新	1	A	2											
10 14号墳	"	円墳	1.5	1.0	3.0	1.1	3.3	2.73	1-中	1	A	2											
11 上野原古墳群 2号墳	加賀郡桑田町	円墳	1.0	1.0	2.5	1.1	2.8	2.26	1-新	1	A	2	4.0										
12 5号墳	"	円墳	1.9	1.0	2.6	1.4	3.6	1.84	1-新	1	B	1	4.0										
13 6号墳	"	円墳	2.0	1.0	2.6	1.3	3.1	2.19	1														
14 伏園西谷古墳	加賀郡志賀町	円墳			2.2	1.0	2.2	2.26	1-新	1	A	1	8.0										
15 特記古墳群 3号墳	加賀郡志賀町	円墳	4.0	1.0	4.5	1.7	7.7	2.69	1-新	2													
16 4号墳	"	円墳	3.0	1.5			4.5		2														
17 竜石山古墳群 2号墳	"	円墳	3.9	1.9	2.7	1.2	4.2	2.65	1-新	2	A	1	3.5										
18 4号墳	"	円墳	3.9	2.0	2.7	1.2	4.2	2.65	1-新	2	A	1	7.5										
19 5号墳	"	円墳	3.8	1.8	6.8	2.1	6.8	2.11	1-新	2													
20 三ツ山古墳群 1号墳	加賀郡志賀町	円墳	2.3	1.0	2.9	1.0	5.5	1.53	1-新	2	B	1	2										
21 2号墳	"	円墳	2.0	1.0	4.1	1.2	8.2	2.05	1-新	2	A	1	2	6.0									
22 3号墳	"	円墳	2.6	1.3	5.8	2.2	8.5	1.75	1-新	2	B	1	2	4.0									
23 4号墳	"	円墳	1.8	1.0	2.8	2.4	6.7	1.76	1-新	2	B	1	3	6.0									
24 5号墳	"	円墳	4.8	2.1	4.8	2.2	10.2	2.34	1-新	2	B	2	2	1	2.5								
25 6号墳	"	円墳	1.6	1.0	4.2	2.2	9.2	1.91	1-新	2	A	2	7.5										
26 7号墳	"	円墳	3.1	1.3	3.1	1.3	4.8	2.05	1-新	1	A	1	3	8.0									
27 天狗前古墳群 7号墳	加賀郡志賀町	円墳	3.0	1.3	4.9	2.2	10.3	2.23	1-新	2	A	1	3	1	1								
28 10号墳	"	円墳	4.0	2.1	8.4	1.9	8.4	1.92	1-新	2	B	1											

第5図 近江における階段式石室一覧

後はII段階まで造られる。I段階新相において、最も多く築造される。

これらの階段式石室を理解するためにも、発掘がなされている樺崎古墳群、塚原A・B古墳群、北落古墳群、尼子古墳群を取り上げ、時期・石室形態に注目してその流れを追ってみる。まずこの地域における古墳の築造開始時期はI段階中相と見て間違いがないだろう。この段階には樺崎古墳群においては1号墳が、塚原A古墳群では土壙2、11号墳、19号墳が、北落古墳群では、5号墳が築造される。樺崎1号墳はこの地域において墳丘および石室の規模において傑出しており、群内における盟主墳と考えてもいい古墳である。I段階新相には、塚原A古墳群において階段式石室のみが採用され、北落古墳群において階段式石室と片袖式石室が採用されている。樺崎古墳群において階段式石室は採用されず、通有の石室のみつくられる。これは次段階でも同じことが言える。II段階になると様相が大きく変わる。塚原古墳群においては、6・7号墳が例外的に階段式石室を採用するが、主流は無袖式石室と小石室にかわる。このことは、北落古墳群についても同じ様相を示している。尼子古墳群はこの時期に築造を開始し、無袖式石室と小石室だけを採用している。しかし、尼子古墳群の3・4号墳、北落古墳群のSX9208などにおいては石室の前面で段を作り素掘りの墓道を設けている。これは、階段式石室のなごりとして理解できる施設であろう。

## (2)その他の古墳群

犬上川左岸扇状地以外の古墳群を順に概観する。

上蚊野古墳群は、愛知郡秦荘町上蚊野の地先に位置する。宇曾川扇状地の扇頂部近くにあり、標高160~170mに所在し、宇曾川両岸に広がる扇状地に形成されていた金剛寺野古墳群の東端に位置する。金剛寺野古墳群は、298基で形成されていた湖東地域最大の古墳群である。上蚊野古墳群もこの大古墳群の一端を形成していたものと考えて間違いのないものであろう。当古墳群は、昭和51年度・52年度の2回にわたり発掘調査が行われている(文献62)。51年度には6基を、52年度には2基の古墳を調査している。そのうち2・5・6号墳が階段式石室である。2・5・6号墳ともに玄室幅が1.6m以下の1

類である。また5号墳においては、棺台の方向から確実に土軸平行葬であろう。階段施設は2号墳が石をおくなどの明確な階段施設が無いものの、玄室と羨道にレベル差が生じている。5号墳はB類1型、6号墳がA類2型、である。中でも6号墳の階段の形態は、玄門部に石を据えた後、羨道部を石の高さまで埋め戻し、そのうえに石を2段積み、その羨門側を埋め戻すことによって階段を形成している。築造時期は、以下のように考えられる。

I段階中相 4号墳・5号墳(階段式)

I段階新相 2号墳(階段式)

II段階 1号墳・3号墳・6号墳(階段式)

これより、上蚊野古墳群においては、I段階中相から同一古墳群内において階段式石室と通有の横穴式石室が導入され、その後も6号墳のように明確な段を有さない形骸化がみられながらも階段式石室と通有の横穴式石室両形態の石室が築造されていると考えることができる。また、築造期間を通して無袖式の石室が造られることはない。

三ツ山古墳群は蒲生郡竜王町に所在し、鏡山(標高384.8m)から派生する丘陵上に12基の古墳が造られている。うち7基が1972年に滋賀県教育委員会によって発掘調査がおこなわれている(文献190)。

発掘調査が行われた古墳は、すべて階段式石室である。玄室幅は、7号墳を除くすべてが1.6m以上の2類である。階段の形態は、1・3・4号墳がB類1型で、5号墳がB類2型、6号墳がA類2型、7号墳がA類1型である。築造時期は以下のようである。

I段階古~中相 4号墳

I段階 ~中相 1号墳

I段階 ~新相 2号墳・3号墳・5号墳・6号墳・7号墳

三ツ山古墳群においては、階段式石室のみで通有の横穴式石室はない。

竜石山古墳群は、蒲生郡安土町に所在し、観音寺山(433m)から派生する丘陵上に5基の古墳が造られている。5基すべての古墳が、1962年に滋賀県教育委員会によって発掘調査がされている(文献90)。そのうち、2・4・5号墳が階段式石室である。玄室幅は、3基とも1.6mをこえる2類である。また、

通有の石室である3号墳も玄室幅が2.0mを測る。実際の埋葬形態は、副葬品の位置関係から2号墳が主軸平行葬、4・5号墳は主軸直交葬をおこなっている。他の通有の石室である3号墳における埋葬形態は、分からない。階段施設は、2・4号墳ともにA類1型で、5号墳は詳しいことが分からない。築造年代は、以下のとおりである。

- I 段階古～中相 1号墳・2号墳（階段式）
- I 段階中～新相 3号墳・4号墳（階段式）・  
5号墳（階段式）

竜石山古墳群においては、木棺直葬墳の1号墳と階段式石室である2号墳が築造された後、通有の石室と階段式石室が築造される。

天狗前古墳群は、蒲生郡蒲生町に所在し、雪野山から派生した丘陵上に20基以上の古墳が築かれていたとみられ、現在10基が確認されている。そのうち1962年に滋賀県教育委員会によって（文献202）6基（1～6号墳）、1985年に蒲生町教育委員会によって（文献88）2基（7・10号墳）が調査されている。このうち7号墳と10号墳が階段石室であり、それ以外の石室は、通有の形態をしている。階段式石室の玄室幅は、ともに2類であるが、それ以外の石室においては、1・2・3・5が1.6m以上で4号墳のみ1.6m以下で6号墳においては不明である。実際の埋葬形態がわかるものはない。階段施設は、7号墳がA類1型で、10号墳がB類1型である。築造時期は、7号墳がI段階中～新相、10号墳がI段階古～中相である。天狗前古墳群においては、時期が不明な古墳が多いが、群形成期より階段式石室が採用されたことは、ほぼ間違いのないところであろう。

#### 4、階段式石室の分類と検討

概観した階段式石室について、検討してみたい。

まず玄室平面の分類においては、同一古墳群内において1類と2類が共存することがほとんど無いことがわかる。共存している三ツ山古墳群においても類型が異なるのは1基だけで、その7号墳もその玄室幅が1.55mと分類基準の境に位置付けられ、2類に分類しても問題のない程度である。古墳群内で共存しない傾向を裏付けるように1類と2類の分布状況が1類は愛知川以北に、2類は愛知川以南にと明

らかに分布圏を異にしている。また1類と2類の違いは第4図のように石室の平面変遷にも現れている。1類、2類ともに玄室幅は導入当初から消滅まで一定値を示しており、前者が1.3mを中心とした幅を、後者は2.0mを中心とした幅を測る。しかし、玄室長においては、導入当初は両類型とも約3.5m～4.0mほどであるが、時期が新しくなるにしたがい1類は短くなる傾向を、2類は長くなる傾向が明らかにみられる。一般的に横穴式石室は時期が新しくなればなるほど小型化する傾向は多くに認められている所であるが、両類型の傾向は明らかにそれでは理解できないものである。

それでは、1類と2類の間には、石室の大きさに基づく埋葬形態の違い以外に別の違いがないだろうか。そこで、古墳群、もしくは地域ごとに階段式石室の在り方に注目してみる。

1類は、まず分布状況から、犬上川左岸地域古墳群と上蚊野古墳群とにわけることができる。古墳群の立地が、ともに扇状地に築いているという点においては共通しているが、石室採用の在り方においては、異なっている。まず犬上川左岸扇状地では、群の構成で3つのグループに分けることができ、一つはI段階中相で築造時期を同じくして通有の横穴式石室を採用するグループ（橋崎古墳群）、一つは階段式石室を主体とするグループ（塚原古墳群・北落古墳群）で、前者のほうは次段階以降もその様相を保ちつつ、後者のほうはII段階を境にして無袖式石室・小石室を採用するようになる。もう一つが、II段階において新たに造墓を開始し、無袖式石室・小石室を主体とするグループ（尼子古墳群）である。

これに対し上蚊野古墳群は、正確な時期が確定できないが、百塚古墳や蝙蝠塚古墳などの大型墳が同一古墳群内に存在することは、橋崎1号墳が階段式石室を主体とする塚原古墳群や北落古墳群と群を別にする犬上川左岸扇状地古墳群の在り方とは対称的である。一方2類は、すべての古墳群が丘陵上に立地する点や、ほとんどの古墳群が群内において階段式石室と通有の石室の両方を採用している点など、共通している点が多い。しかし、マクロな視点で見ると、階段式石室のみで群を構成する三ツ山古墳群、階段式石室よりも通有の横穴式石室が群の主体となっ

ている天狗前古墳群というように2類の中でも細分することはできる。

次に階段施設の形態分類においてだが、まとめると以下のようなになる。

1 A類1型：祇園西塚古墳・三ツ山7号墳

1 A類2型：塚原A1・2・6・10・19号墳、  
上蚊野2号墳

2 A類1型：竜石山2・4号墳、三ツ山2号墳、  
天狗前7号墳

2 A類2型：三ツ山6号墳

1 B類1型：上蚊野5号墳

1 B類2型：塚原7号墳

2 B類1型：三ツ山1・3・4号墳、  
天狗前10号墳

2 B類2型：三ツ山5号墳

これをみると、B類1型→A類1型→A類2型・B類2型といった時間的な流れをみる事ができる。ここで平面分類に重ね合わせて考えると、B類が2類において採用される傾向と、A類2型が1類を中心に採用される傾向がみられる。またA類2型は、階段造成過程において石を設置した後いったん土を石の高さまで充填し、そのうえに石を設置するものと、石を2列に設置した後間に土を充填するものに分けることができる。前者は上蚊野2号墳・三ツ山6号墳、後者は、塚原A1・2・6・10・19号墳あることも指摘しておきたい。

## 5、おわりに

平面分類と階段部の形態の分類を行いそれぞれ検討してみた。特に平面分類においては、支室幅が埋葬形態の指向に準じているという仮定のもとに分けてみたところ、分布地域を2分することがわかった。それは、愛知川を境として北部地域（犬上・愛知郡）と南部地域（蒲生郡）とにである。これが意味するところは大きいと思われる。つまり、埋葬形態の指向というものは、葬制を形作る大きな要素であるからである。そしてこの違いは、両地域の階段式石室の系譜の違いを表している可能性があると考えられる。それは、導入後の、石室の展開の仕方も両地域対称的なこともこれを裏付ける現象であろう。

それでは、両地域の階段式石室はどのような地域

からの系譜を想定できるだろうか。一つの可能性をあげてみたい。両地域の階段式石室の特徴を簡単に表現するならば、1類はより濃く北部九州の堅穴系横口式石室の特徴を備え、2類は、1類とは反対に北部九州の堅穴系横口式石室の影響が薄いといえるだろう。言い換えるならば、1類は、北部九州にみられる堅穴系横口式石室の直接的な系譜を、一方の2類は石室形態において北部九州の堅穴系横口式石室の影響はみられるものの、埋葬形態の違いという大きな差異がみられることから、間接的な系譜が想定できる（註2）。つまり2類は、別の地域において北部九州の堅穴系横口式石室が、本来の埋葬形態が失われ、別の埋葬形態に変化したものが入って来たものであると想定できるのである。2類の階段式石室は、北部九州に見られる典型的な堅穴系横口式石室が、より通有の横穴式石室に近づいていく段階の石室の一形態であると考えればよいのかもしれない。それは、2類の古墳群の石室構成や天狗前7号墳にみられる通有の横穴式石室化している石の積み方がそれを象徴しているだろう。

階段式石室は、先学の研究に言われているように、渡来系氏族の墓制であるとする事が定着した観があるが、今回指摘したように系譜を一元的に理解するには難しい点も多くある。それは、通有の石室と階段式石室の採用のされ方が、古墳群間の差異ではなく、古墳群内に存在することもそれを裏付けているだろう。渡来系氏族の動きが関係していることは間違いのないところであるが、今後他の資料からのアプローチによる新たな視点での検討を期待したい。

## 註

註1 甲良町教育委員会技師宮川哲郎氏の教示による。

註2 筆者は、時期・石室形態等より三重県北西部地域からの流れを想定している。



## 編 集 後 記

『紀要』の第10号をお届けいたします。

本号には多数の寄稿をいただいたため、紙幅の関係上、体裁を若干変えざるをえなくなりました。見にくい点等があらうかと思いますが、どうか御了承下さい。

さて、本号をもって、この『紀要』も10歳を迎える事になりました。ここに至る間には、多くの方々の御指導・御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。今後とも職員の研究活動の拠点として、さらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的な御叱正・御鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

(T・M、T・T)

平成9年3月

## 紀 要 第10号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会  
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL:(0775-48-9780)

印刷・製本：明文舎印刷商事株式会社  
滋賀県長浜市森町中久保386